

## 全力で生きた歩んだ35年

写真は毎日新聞3月26日夕刊1面。リードから一人工呼吸器をつけて地元の小中高に通い、成人後は1人暮らしを実現した社会活動家、平本歩さん（兵庫県尼崎市）が1月、35歳で亡くなった。強い意志で社会のさまざまな障壁を乗り越えていく生きざまは、多くの人たちの道しるべともなった。「歩の歩みを伝え、受け継いでいく」、母美代子さん(70)は遺影に誓う。

昨日レポートした名古屋の林京香さんが尊敬し、慕ってきた歩さんの歩み後半を紹介したい。

歩さんが高校を卒業して2年後、父の弘富美さんが病死した。精神的支柱を失い毎日泣いていた美代子さんに、歩さんは「お母さん、泣かないで。私がついているから大丈夫！」と文字盤を使って励ました。「私が歩を守らなければならないのに、あのとき立場が逆転してしまった」



弘富美さんは、歩さんに「自立に向かって邁進せよ」と遺言を残していた。その言葉に背中を押され、歩さんは2011年、25歳の時にマンションで1人暮らしを始めた。ヘルパー2人が24時間付き添い、介助を受けながら時には講演や旅行で全国を飛び回った。自立心旺盛で、美代子さんが部屋をのぞくと「用が済んだら早く帰って」と追い出されたこともあった。

歩さんは昨年、「在宅30周年記念パーティー」を計画していたが、新型コロナウイルス禍で2度にわたり中止されていた。美代子さんは1月18日の通夜をパーティーに代えることにした。小学校時代の同級生もお別れに駆けつけた。ある男性は「歩さんは僕たちに何でも教えてくれました」と語った。美代子さんは地域の学校で共に学ばせてよかったと喜びをかみしめた。

美代子さんは翌19日、歩さんにメッセージを書いた。幼い娘を動物園に連れていったとき、周囲から集まる視線を気にしてしまったこと。レストランで「気持ち悪いから早く出てって」と言われ、反論せずにそのまま帰ってしまったこと。娘は胸を張って生きてきたのに、自分が差別する側にいたことを、ずっとわびたかった。

〈一番力をもらったのは、親である私です。最も理解すべき親があなたを差別したことがあったと思うと本当に申し訳ない気持ちです〉

振り返ると、人はどうやって生きていくのか、どう生きるべきなのかを娘が教えてくれた気がする。「歩に続く人に寄り添い、障害者と健常者を分けようとする社会を変えていきたい」。今、そう思う。

記事を読みながら、何度も目頭があつくなかったが、やる気もわいてきた。

(2021年3月28日)